

ていました。

家に行くとオモニが待つてくれていて、いろいろとごちそうしてくれました。会話ができないことを寂しく思いました。「長男が学校の先生で、これが嫁さんだよ」と、若い娘さんを紹介してくれました。この女性には日本語が上手で、私によくしてくれました。

「私は本妻ですが、主人には三人のお嫁さんがいます。私には子どもができないので寂しい思いをします。でも、お母さんが優しいので辛抱しています。あなたは、子どもがたくさんいるので生きて行けます。頑張りなさい」と、美しい日本語で話してくれました。

いろいろとお土産をくれ、また送ってきて「もう売るものがないので来れないね。でも、私がまた来てあ

げますよ」と言ってくれました。さらに「これから、私の知人の家に連れて行くからついて来なさい」と言い食堂へ連れて行かれました。

金波楼という食堂でした。ここのご主人は、学校の先生でアボジの教え子とのことです。家人は全員が日本語が分かり助かりました。「あなたのことは全て話してあるから、一日に一度食べさせてくれる。自分ができる仕事をして、青汁を飲んで栄養を取りなさい」と言って帰って行きました。

私は、アボジの後ろ姿に涙を流しながら深く頭を下げました。

金波楼には、日本人女性が一人いました。今井三津子さんと言ひ、皆から三津ちゃんと呼ばれ、東京の美術大学の学生さんでした。お父さんと満州に親子三人で住んでいて、夏

休みに来ている間に終戦になったとのこと。満州から元山まで逃げて来て、お母さんが病で倒れ、アボジの世話で働いていたのです。三津ちゃんが、お店で私の名前を何と呼ぼうかということになり、「好きな名前を付けて下さい」と言いました。

この店の弟さんは、東京の大学に行っていたが、空襲が激しくなり戻っていたのです。下宿の娘さんがつや子さんと言ったので、私の呼び名は「つやちゃん」になりました。弟さんは、東京では「広さん」と呼ばれていたとのことでした。

お店の奥さん（お母さん）が、毎日、青汁を作ってくれ、私は次第に元気になり、幸せでした。

時々、アボジが自宅までお米を持って来てくれ、子どもたちも「おじいちゃん」と呼び、喜んでいました。